

令和6年度（2024年度）

印旛地区教育研究集会 外国語研究部提案資料

研究主題

「ICTを活用した、
表現力を高めるための授業内容の工夫について」

八街市立八街中央中学校 英語科

小松和枝 佐藤恵美 松澤栞花 小林厚子 山口恵美子

1. 研究主題

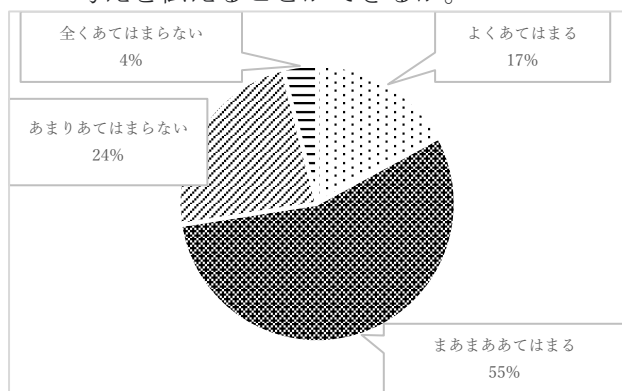
ICTを活用した、表現力を高めるための授業内容の工夫について

2. 学校および生徒の実態

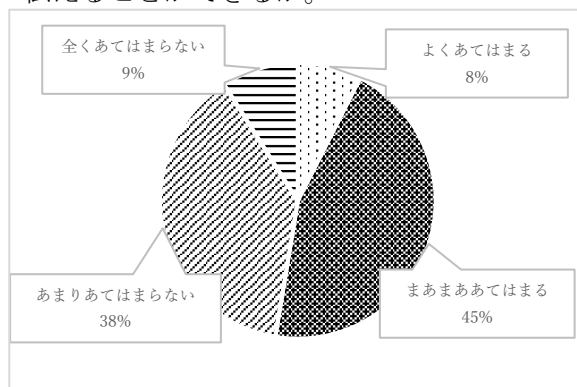
本校は千葉県八街市の中央に位置し、昨年開校60周年を迎えた。全校生徒493名（1学年5クラス、2学年5クラス、3学年5クラス）からなる中規模校である。本校が位置する学区は、住宅と農地が混在しており、近年住宅が増えてきているため生徒数は増加傾向にある。また、外国籍の生徒も増加しており、日本語が不得手の生徒が各学年に数名いる。特別教室も含め、各クラスに電子黒板が設置されており、生徒に1台ずつ貸与されているクロムブックは、自宅に持ち帰り使用することが可能となっている。ALTについては、1名が校内に常駐しており、各クラスで週に1度 Team-Teaching の授業が行われている。学力は市内の学校と比べても高いとは言えず、学習の習慣づけや低学力の生徒への対応が必須となっている。

今回、生徒の実態を知るために、「ICT機器を用いて英語学習を行うこと、英語を用いて表現すること」に対する生徒の意欲について、以下のアンケートを行った。

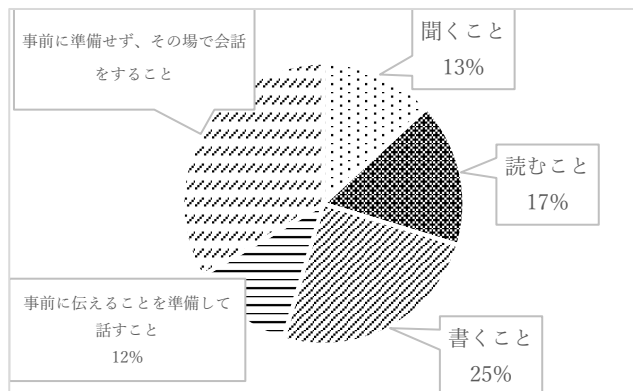
(1) 日常生活の中で、自分の意見や考えを伝えることができるか。



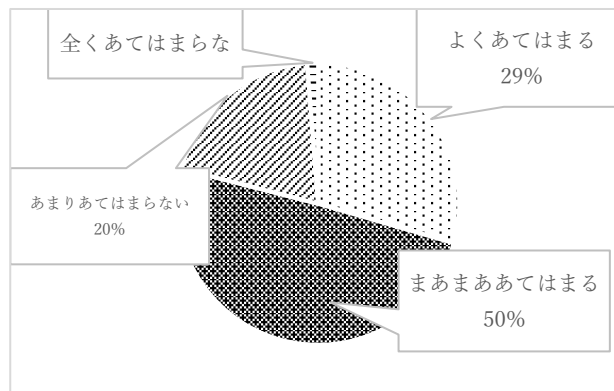
(2) 英語で、自分の意見や考えを伝えることができるか。



(3) 英語で「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「事前に伝えることを準備して話すこと」「事前に準備せず、その場で会話をする」とのうち、特に苦手なことはどれか。

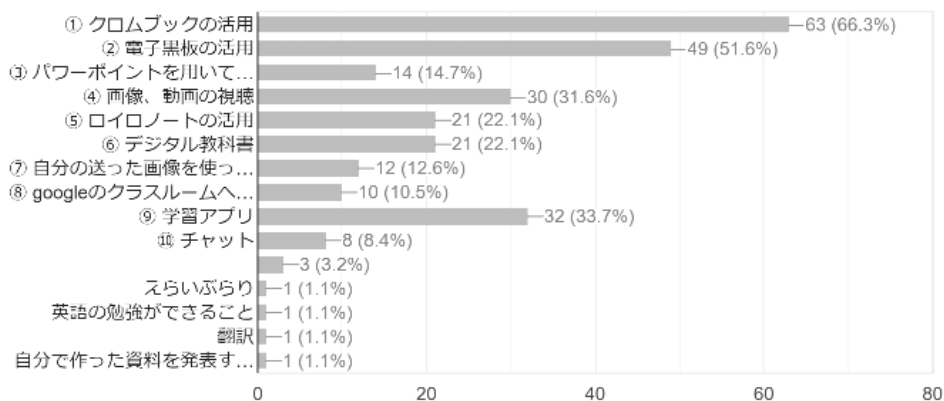


(4) ICT活用は英語学習に役に立つと思うか。

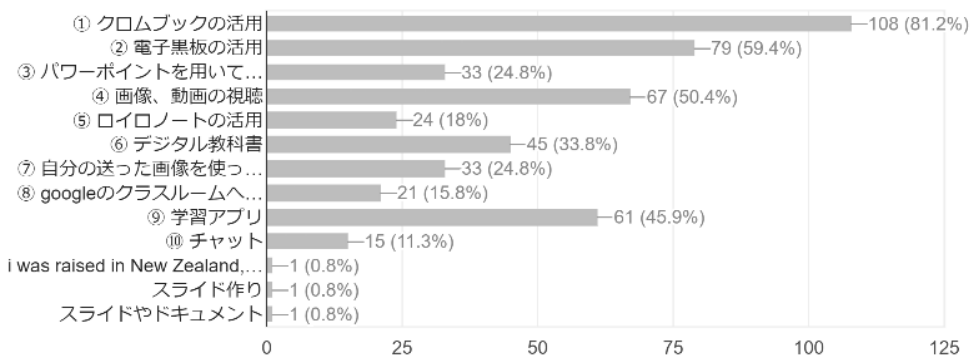


(5) [(4) で「よくあてはまる」や「まあまああてはまる」と答えた人] ……どのようなことが英語学習に役立っているか。(複数解答可)

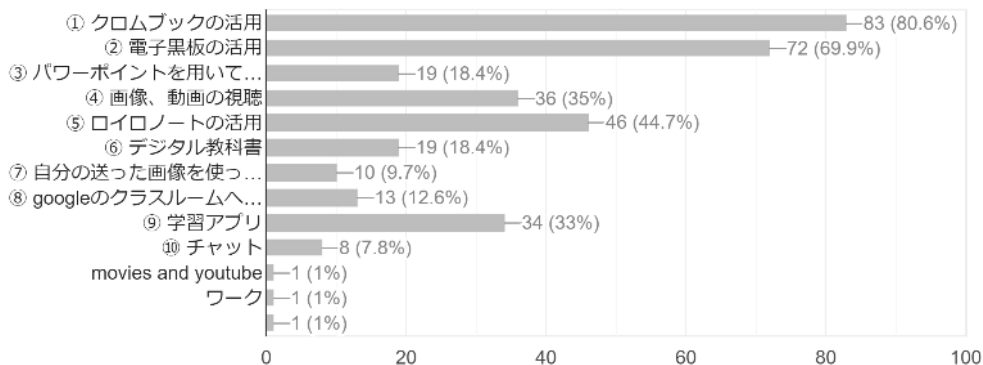
1年



2年



3年



(6) その他、学校での英語学習について何かあれば書いてください。

- ・電子黒板のスライドでの説明がわかりやすく、そのあと理解を深める問題を解いて先生が一人一人確認してくれるので安心する。
- ・クロムブックで検索して資料を集め、班で考えをまとめて電子黒板で英語発表することが楽しい。
- ・先生が電子黒板のスライドで説明するのが分かりやすく、すぐに理解できる。
- ・スライドを用いての発表が好き。
- ・電子黒板を使った説明がとても分かりやすい。そのあと、説明をクロムブックのクラスルームに送ったり、まとめたプリントが配布されたりするので確認できるのがよい。

- ・クロムブックを用いての自由作文が好き。
- ・クロムブックを使ったゲーム(kahoot など)をもっとやりたい。
- ・クロムブックを使った英語遊びなどが楽しい。
- ・ネットレ(サイト)での単語学習がよい。

アンケートの結果から、各学年とも4分の3の生徒が「日常生活で自分の意見や考えを伝えることができる」、約半数の生徒が「英語で自分の意見や考えを伝えることができる」と考えていることがわかった。小学校英語でのスピーキング、会話の機会が増えてきていることが影響していると考えられる。その一方、「事前に準備せず、その場で会話をする事」を特に苦手と考えている生徒が各学年、もっとも多くなっている。学年が上がるにつれて増えているので、小学校と違い単語の羅列や **Broken English** ではなく正しい英文で伝えなければいけないと感じている生徒が多いためと思われる。また、ICTの活用が英語学習に役に立つと考えている生徒の割合は全学年多くなっている。クロムブックにおいては、小学校から使ってきているので、導入された当初と比べどの学年の生徒も基本的な技能が身につけてきており、ICTの有効性について身近な部分で実感しているものと考えられる。具体的に役立つこととして、「クロムブック・電子黒板・学習アプリ・画像や動画の視聴・ロイノート」などがあげられている。

これらの実態を踏まえ、ICTを用いた指導を工夫していくことで、生徒たちの学習意欲が高まり、英語の学力向上を期待することができるのではないかと考えた。

3. 主題設定の理由

本校の今年度の研究主題は、「自分の考えや思いを主体的に表現し、協働的に学習できる生徒の育成」であり、全校で教科の枠を越えた相互授業参観や学期ごとの研修発表を実施している。「学力向上と表現力の向上」を軸に研修を重ね、今年で4年目の研究となっている。そこで英語科としては、努力点に「場に応じた自己表現能力を高める指導法の工夫」を掲げた上で、今やどの教科においても当たり前前に活用されているICTを、英語科として指導の中でどのように使っていくか、どのように学力向上につなげていくかを考えていくこととした。

また、英語科特有の課題となる「学力差の大きい生徒たち」に対して、いかにして授業に飽きさせず一方で諦めさせずに取り組ませて、学ぶことの楽しさを通して自主的に学ぶ意欲につなげていくかという点でも、教科でチームとして取り組んでいくべき主題であると考えた。アンケートの実態からも、授業において、興味関心をひきつける入口が多くあるICTの活用を中心に指導方法を考えていくことは、生徒たちの学びの好奇心を引き出す大きな動機となると考えられる。

一方で、ICTの活用だけにとらわれずに、「英語の特徴や決まりに関する事項を理解する知識」や「日常的・社会的な話題についての事実や自分の考え、気持ちなどを捉えたり伝え合ったりする技能」を身につけるためには、従来の指導法やアナログとも思われるノート作りや字を書く活動も不可欠だと考えるので、その有用性なども考慮に入れていくこととした。

そして、基礎基本の土台を培うことと平行して、「思考・判断・表現力」をつけていく指導や「主体的に学習に取り組む態度」を高め育てていく指導について、具体的にどんな指導を継続して行っていくかを考えていくことが非常に有用だと考え、本主題を設定することとした。

4. 研究仮説

仮説1 ICTの活用を含む授業内容の工夫を行えば、生徒の「英語で表現したい」という意欲が高まるだろう。

仮説2 基礎力を身につける取り組みを日々継続的に行えば、生徒に英語を運用するうえでの自信が身につき、意欲が学力向上にもつながるであろう。

5. 研究の内容

(1) 仮説1において

実践① 授業内容の工夫

ICT活用を中心とした授業内容の工夫

○導入の工夫

- ・定期的に時事的な話題を扱い、視野を広げさせるとともに、自分の考えを持たせる。また、スライドやアプリケーションを活用し、テンポよくポイントを絞った授業を行う。

→資料1-1 (1~3学年: アプリケーションの活用①)

資料1-2 (1~3学年: アプリケーションの活用②)

○英作文作成時の工夫

- ・普段の授業において、英作文作成時は個人のタブレット(クロムブック)での翻訳機能の活用を辞書の代わりとして使用させる。

→資料2 (1学年: ALTへのお手紙)

○プレゼンテーション時の工夫

- ・発表時にスライドアプリを活用させる。

→資料3-1 (1学年: Project アンケート集計)

3-2 (1学年: L7-2 理想の町)

3-3 (2学年: L1-1 SV00 文の班発表)

○日常的なICTの活用

- ・校内では、Google (グーグル) アプリ内におけるClassroomがクラスごとに準備されている。ストリームへのプリント配布や課題の提示・黒板の板書写真などの投稿、YouTubeやホームページサイトへのリンクの貼りつけなどを積極的に行う。

- ・電子TVやデジタル教科書の活用。

- ・Lゲート内のアプリやネットにある有効なアプリを紹介して、基礎力・応用力を磨くことを授業で呼びかけていく。

・・・eライブラリ, Edu Mall, ミライシード, 教育出版ホームページ内の学習資料

(レベル別ワークシート), ワークブックの学習アプリ (単語・デジタル語順トレーニング) など

→資料4 (1~3学年)

(2) 仮説2において

実践② 基礎力を身につける取り組み

○英作文活動

- ・単元テスト内での英作文において「＜主体的に学習に取り組む態度＞の観点を含む問題」を取り入れて、文法に間違いがあっても書く意欲としての評価に加えている。

→資料5-1 (1学年：七夕の願い事)

資料5-2 (2学年：単元テスト)

○帯活動

- ・授業のはじめに、文法チャンツ (1・2学年)、QA活動や単語練習・BINGO (1～3学年)、1分間スピーチ (3学年) などを入れて、基礎的力をつけるようにする。

→資料6-1 (1学年：文法チャンツ)

6-2 (3学年：1 Minute Talk)

6. 研究の成果と課題

(1) 仮説1

- ICTの活用を含む授業内容の工夫を継続して行うことで、英語が苦手な生徒も含め、授業に対して意欲的に参加したり、積極的に自分の考えを周囲の人に伝えたりする生徒の姿が見られた。
- 英語に対して関心を持たせるための様々な工夫を行ったことで、それぞれの目標やアプローチ方法を見つけ、自主的に英語学習に取り組む生徒が増えた。
- 学年ごとに段階的なプレゼンテーションを行ってきたことで、プレゼンのコツを知り、全体の前で堂々とICTを活用して発表する楽しみを知る生徒が増えた。
- ▲日々の授業において「基礎・基本が身につく授業」を意識して行うことが大前提であり、その中で工夫を凝らして、「分かって嬉しい・伝わって嬉しい体験」を積み重ねることを心がけていくことが必要である。
- ▲ICTに頼りすぎることなく、特性やメリット・デメリットをよく知った上で活用していくことが求められると感じた。

(2) 仮説2

- 基本文法を使って、自分の立場で表現する条件作文を授業内で継続して行ってきたことで、1～3文程度の英作文を作ることへの抵抗感が薄れてきた。力のある生徒においては、掲示物などでよいノートを紹介したことでお互いに刺激しあい、英作文のレベルが大いに向上した。
- BINGOは時間を取り過ぎずにテンポよく行うことで、単語や熟語のよい復習となり、モチベーションが高まった。
- 継続的な活動は、生徒にとって先が見通せるので、自信を持って自分の考えを言う雰囲気定着した。

- ▲ 翻訳アプリにそのまま日本語を入れて翻訳してしまう生徒には、なかなか文の作り方が分からない様子なので、粘り強く何度も声をかけ、文の作り方のコツをつかませる必要がある。
- ▲ 家庭学習やノート作りで英作文の学習習慣がある生徒に比べ、苦手な生徒は即興的な反応が弱い者が多く、基礎的な知識・理解力をつけさせる取り組みが引き続き必要である。

(3) まとめ

日本語であっても英語であっても、一般的に「表現力を高めるため」には、「様々な場で自分自身の考えや思いをもつ」ことや「人に伝えたり人前で表現したりすることに慣れる」ことの経験を日々の生活の中で重ね、同時に「よいモデルをまねして最終的に自分のものにする」ことで習得したり上達したりしていく。そのため、今回私たちは、授業で様々な工夫を凝らし、「語彙や熟語」「役立つ表現・フレーズ」に何度も繰り返し触れる機会を作ったり、「場面に応じた定型の型」を学年ごと段階的に継続して身につける時間を設けたりして、生徒の力をつけさせることを努めてきた。

そういった日々の授業の中で、率先して英語学習に取り組み、次第に学力の向上につながる姿を見せるようになった者は、次のような生徒たちであることが多かった。自分で作った英作文を発表し友人からよい反応をされた生徒、ALTの先生とのQAテストで伝わる楽しさを知った生徒、プレゼンテーションの発表でクラスメートからの賞賛や手応えを大いに感じた生徒。表現活動をきっかけに、英語学習の楽しさを知り、自主学習が増えるとともにテストでも点数が取れるようになる、という生徒たちが授業の中心となって普段の授業をリードしていく。すると、次はその周りで、よいモデルとなっている彼らの取り組みを見て、表現のコツや学びの方向性を知る生徒が出てくる。その結果、クラス・学年全体の表現力とともに英語そのものへの意欲が高まっていく、という相乗効果を私たちは目のあたりにしてきた。

もちろん、英語が苦手な生徒は依然として存在し、全ての生徒が得点を奇跡的に向上させるという点には至らないものの、授業で表現することに手応えを感じるのは、学力の高い生徒だけでなく苦手な生徒も含まれている。両者が同様に生き活きとした表情で参加し、それぞれの語りを披露しようとする姿は教員冥利に尽きるころである。

そういった場面では、ICTの役割は、辞書的な意味でもアプリなど手軽に活用できる道具としても、学力差のある生徒たちのどの層にも相性がよいものであると感じている。テストでは使えないICTではあるが、実際の社会に出たときにICTを使いこなしてコミュニケーションを行う技術は、時代の波がまだまだ大きく押し寄せる生徒たちの未来に必要不可欠なものである。

何よりも、「自分の思いや願い・考え」を自分の言葉で伝える経験は、必ず生徒たちの成長につながるものである。地域の環境や教員の力量に左右されることなく、教員自身が様々なICTの活用においてアップデートし続けていくことで、これからも学校全体で効果的なICT活用を行いながら、表現活動を中心にした指導を継続していきたい。